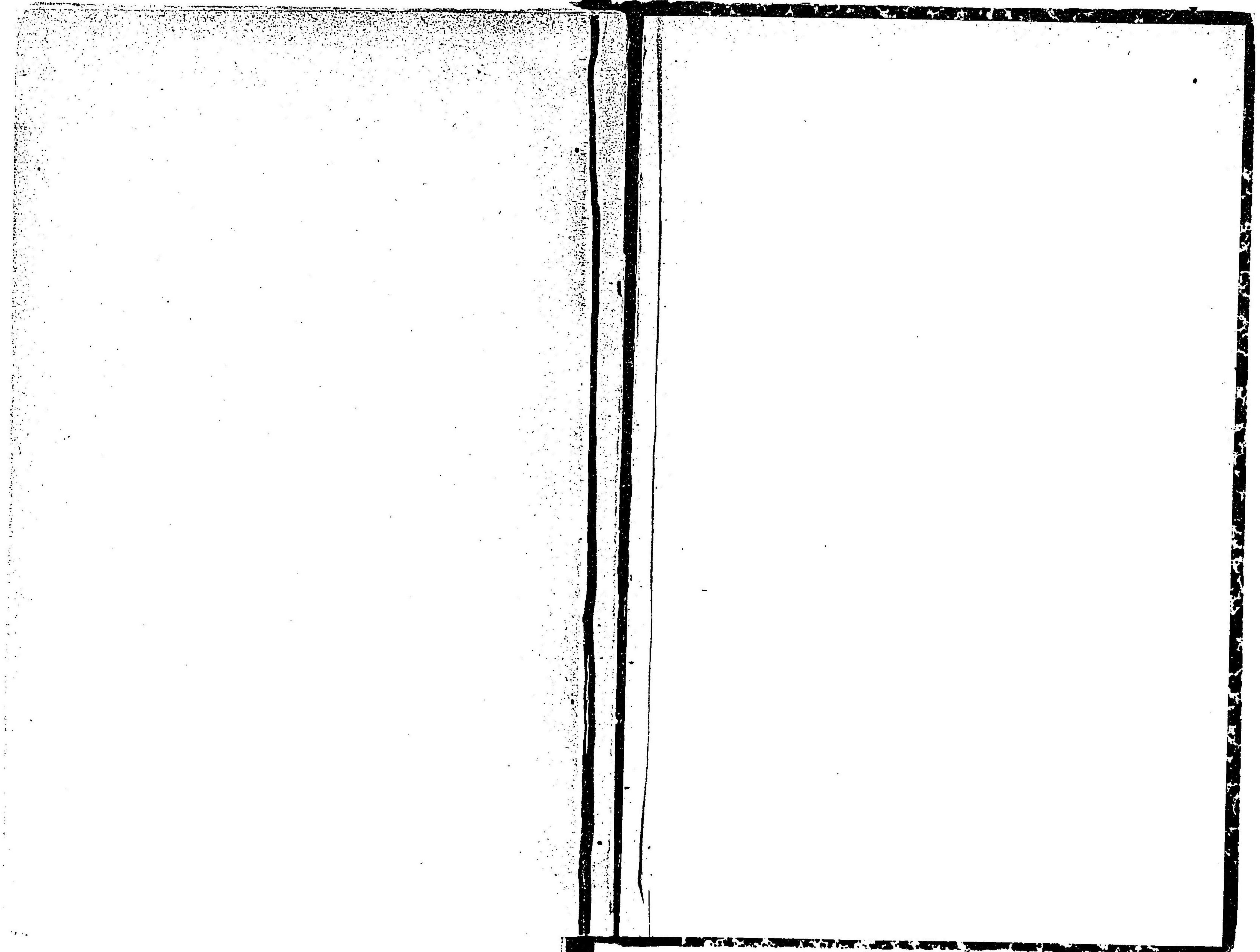


92

180

(M)

振天府拜觀記



都新聞主筆
東京市會議員
宮川鐵次郎拜記

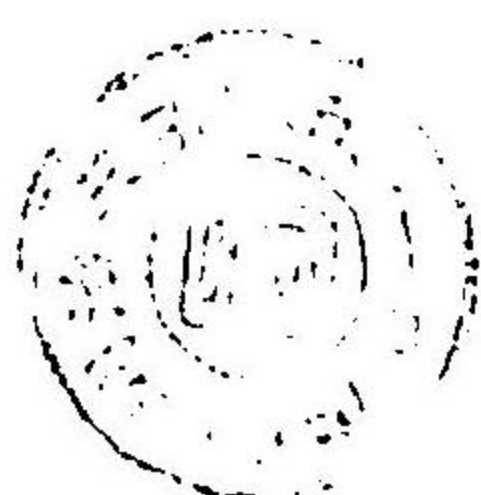
振天府拜觀記

東京

保成堂發行

小引

明治二十七八年戦役は我國振古未曾有の大功業と爲す。上代に神后の三韓征伐あり、中世に阿部比羅夫の肅慎遠征あり、近代に豊公征韓の役あり、我皇の威武を海外に輝やかしたるもの古に其例無きにあらずと雖も、其名分其成功其規模を以て征清の師に比すれば月前の星砲下の小銃共に目を同うして語るべからず。當時我軍の向ふ所海に陸に勝たざる無く、一舉して韓山八道一の清兵無く、韓海千里一の清艦無し、遠く遼河



を涉り渤海を扼し澎湖を畧し朝に摩天嶺の雪を踏んで夕に媽宮の熱砂に眠る南戦北伐我軍の勞や大なりと謂ふべし而も彼等は勇躍陣に従ひ寸毫も退避せざる所以のもの一に我皇に忠ならむことを欲すれば也戦勝て砲烟猶ほ漠々たるの時天皇陛下の萬歳を三唱する軍人の壯快果して奈何ぞや陛下亦た深く臣民の忠勇國に盡すを嘉賞せられ幾度か優渥なる詔勅を軍隊に降し賜ひたるのみならず陣歿者の肖像氏名其遺物及び戦勝紀念物等を永遠に保存し賜はむが爲め一堂を宮城内に建設せられ振天府

二

と命名あらせらる是れ實に聖徳の餘光にして臣民名譽の府なり

聞くならく頃日陛下更に振天府の題額を調製せしめ賜ひ且つ朕が子々孫々に至るまで永く保藏して忠勇なる國民の功績を不朽に傳ふべしとの聖意を文して其裏面に刻せしめ賜へりと聖徳の廣大海嶽の如し眞に感泣に堪へざるなり
余幸に東京市會議員の班に列するの故を以て特に振天府の拜觀を許され且つ侍從武官長岡澤中將の熱心なる説話を聴くを得たり物皆痛快事皆壯烈正に是れ

三

帝國臣民の品性を修養し、義勇奉公、恭儉持己、博愛及衆の精神を發揮すべき好個の實物示教なり、修身齊家の範、此一府に備はると云ふも過言にあらず。然れども九重雲深くして國民は汎く拜觀の榮を得る能はざるが故に、余不才自から測らず拜觀せる所の一斑を記し、拜聞せる所の梗概を叙して之を都新聞紙に掲ぐる事連日聊以て世の風教に益せむことを期せり、數日の後吉川氏來りて書冊に編せんことを需む余或は誤を傳へ違を告げて以て罪を天下後世に負はんことを恐れ、某中將を其邸に訪ひ、稿を示して敢て其斧正

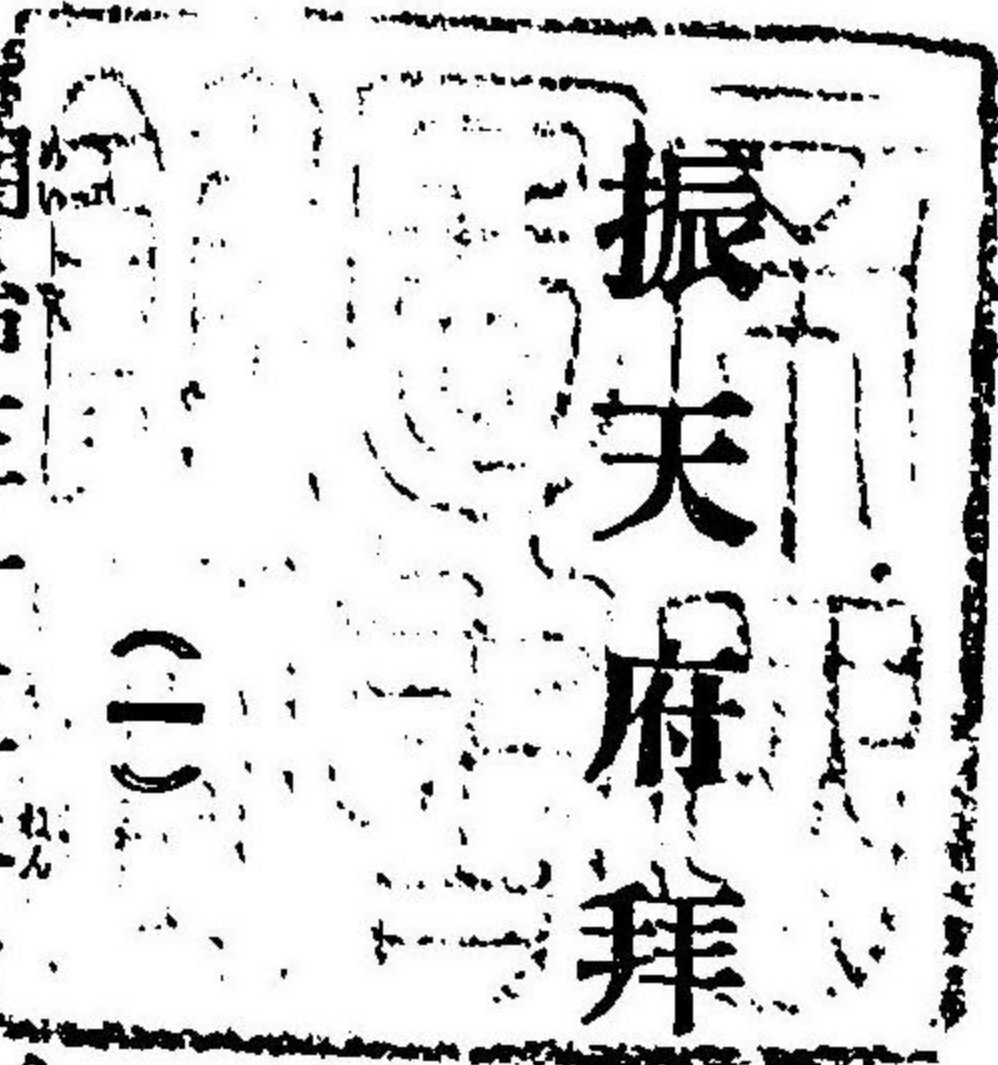
四

を請ふ中將爲に閱を加へられ、事實の相違若くは意義の不足なる點を指示せらるゝこと數ヶ所、余乃ち傍らに聞いて傍はらに筆し、舊稿を修正増補して始めて完璧に近きものを得たり、然れども舊稿もと名玉にあらず、琢磨工を成すも千乗の光を放つ能はざるを奈何せむ、只夫れ其記する所は我國千古の偉業に關し、我皇無量の恩光に屬するが故に、其文や瓦礫と雖も、其事實は當に是れ黄金明珠、萬世に亘りて光明赫耀たるべし。

明治三十五年端午の日

於都新聞社編輯局

雲外宮川鐵次郎誌



振天府拜觀記

宮川鐵次郎拜記

明治三十五年三月二十七日東京市會議員に振天府の
拜觀を差許さる余も其榮に與かるを得たるを以て其
拜觀せる事實の一斑を記して 仁徳高き大御心の萬
分が一を天下に報ぜん
振天府は明治二十七八年及び臺灣の役我軍隊より戦
利品或は紀念品として 大元帥陛下の御手元に捧呈

せる品々及び忠死者の寫眞姓名武器等を永く御左右
に保存し給はんとの御思召を以て宮城内に建てられ
たるもの櫻田門外老松碧潭に映ずる邊りに立ちて仰
げば道行く童も其外柵を拜するを得べし
余等拜觀の一行は午時車を連ねて坂下御門より宮内
省に出頭し案内の吏員に導びかれ右に宮殿の廊壁を
拜し常盤の松の茂れる土堤に沿ひて珠か礫か清らか
に敷き詰めたる砂を踏んで二重橋御門を出づれば左
に中雀門右に山里の御門あり左に折れて又も一の御
門を潜り爪先上りに吹上御苑の方へと進めば御苑の

入口に面して堤上に簡素たる一字の建物あり間口二
十間許り奥行四五間もありなんか是れを振天府とこ
そ拜し奉る
來る道々には青松老幹雨露の天恩に浴して翠綠滴ら
むとし間々櫻を交へて蕾既に紅なり仰げば大宮の蔓
高く聳へて天に紫雲あり俯して城池を臨めば水は鏡
の如く竹林之を繞りて瑞靄地に湧く四圍の光景人を
して轉壯嚴の感に堪へざらしむ
導びかるゝ儘に蓆を敷ける段を上りて振天府の内に
入れば白髮雪髻の老將軍屹然として前に有り余等の

來り集まるを待ち嚴かに曰く「私は侍從武官長岡澤で
あります本日諸君が拜觀にお出の事を陛下に於て
聞き召され私に案内をしてよく話を聞かせよと
の仰せであります」と一同聖意の辱じけなきを拜謝
し難有う御座いますと御禮を申上げたる人もありき
斯くて岡澤中將は余等のために一々陳列せる物品を
指點し其由來其性質及び之に對する陛下の思召を
も説明して實に余等を感じ涙に咽ばしめたり

(三)

見渡せば場内所狹きまでに陳列せられたる品々は皆

是れ朝鮮遼東山東若くは臺灣の地に轉戦して赫々た
る功を奏したる我軍隊より陛下の御覽を仰がんが
ため萬里の山海を輪びて捧げ奉りたる戦利品及紀念
品にして例の青龍刀蛇鉞槍銃劍の類もあり眞先に
余の眼に入りたるは高さ六尺程の朱塗りの立札に大
書したる「細柳將軍」の四字なり是れ將軍として似合は
しからぬ名稱なるが故に余が注意を惹きたりし也再
思徐ろに記憶を探れば是なむ面白き故事ある支那の
名將軍其事蹟は蓋し一場の説話と爲すに足らん

細柳營 (参照)

西漢文帝時匈奴寇邊。上命劉禮屯灃上。徐厲屯棘門。亞夫屯細柳。以拒之。上自勞軍至灃上棘門。皆直入。已而至細柳。竟不得入。上乃使人持節詔將軍曰。天子入營。亞夫乃令開壁門。上乃按轡徐行至營。以軍禮見。乃嘆曰。此真將軍也。若灃上棘門。真兒戲耳。其將可虜也。

時に岡澤侍從武官長は振天府御設置の由來を説明し夫より一々物品を指點して魚形水雷の構造運用効力海上鎮護の神として清國各軍艦内に祭祀せる天上聖母の廟威海衛に沈没せる定遠の艦にありたる名標龍の大なる彫物あり等の由來を細説し了るや側らの棚

より圓徑五尺もあるべき籐の編笠様のものを取卸し之を自からの左の腕に懸け右手を高く擧げ劔を揮ふ様を爲しつゝ語るらく是れは古の戦ひに用ひたる楯であります。ユ一云ふ風に身體を隠して敵中に切込むのですが希臘の古代では兵士を十六列に組んで手に楯と劔を持つて敵に突貫したものです。所が武器の進むに隨がひ成べく列を薄くする必要を感じて六列と爲り三列と爲りナポレオン一世が露西亞に敗れて還つてからは二列にしました。が今では一列でも猶ほ精銳なる武器の効力を充分に示し得るのみならず

敵火に對し危険の度を減ずるため散兵を以て戦かふ
事になりました思ふに此楯は如何に支那人でも今の
戦ひに用ひたのてはありますまいと語り了りて一轉
右なる棚を指さし語調を改ため肅然として曰く
此に在るのは陛下が廣嶋大本營に御在の初日夕御
愛玩あらせられたる花瓶であります諸君も御承知の
如く陛下の廣島にあらせらるゝや其御居間はタツ
タ一間であつて申すも畏き事ながら御食事も御寢も
御政治向の事も總て此の一ツの御坐所にて爲させら
れ戦地より情報戦報到着の事を申上ぐれば如何に御

八

夜中にも直ちに御起き遊ばされ地圖に照して一々
報告を御覽相成りたる其御精勵は申すまでも無く御
儉徳に富ませ給ひし事も此の花瓶にて御察し申上ぐ
る事が出来るのである陛下には此の花瓶を御手づ
から御工夫遊ばされ一ツに四兵を見るの思ありと仰
せられましたと其説明や鄭重なれども余は中將の指
示せる邊りに花瓶らしきものを見ず只騎兵の鎧と鞭
らしきものを見るのみ不思議に堪へざりしが聽て中
將は其鎧と鞭らしきものを取り上げて語を繼ぎ此騎
兵の鎧の上に此砲彈の信管を載せ之に水をたゝへ此

九

十
 れを小銃の込矢と工兵の使用する電線にて天井の釘
 に釣り置かれたのである斯く歩騎砲工四兵の武器を
 以て御工夫あらせられたる花瓶であるが故に一ツに
 四兵を見るの思ひありと仰せられたのであります此
 に至りて余は始めて四兵の花瓶の由來を明らかにし
 偏へに陛下の兵士を愛し儉素を事とし且つ風流に
 富ませ給ふ聖意の程を感泣せり今ま余が拜見する所
 に依りて花瓶の形を模寫すれば左の如し

工兵用電線

歩兵用小銃込矢



砲兵用鐘

此花瓶に飾られたる一輪の名花こそ菊か椿か梅か櫻
 か蓋し千草萬卉の榮を萃めたる百花の精ならぬ斯く
 て中將の指頭の示すが儘に仰ぎ見れば支那人得意の
 筆法を揮ひたる大額數面を掲ぐ内に斯文在茲の四大
 字を金泥にて現はしたるものあり正面上段に一大朱
 印を捺し且つ額縁に金色の龍を刻める様一見普通の
 ものにあらず是れ即ち勅額にして岫巖の一學校に掲

十二
げありたるものなりと云ふ清國の制規として勅額の
有る所官人も手を下す能はず況んや民人をや故に歐
人往々教會保安の一策として勅額を掲ぐるを以て外
交談判の一條件と爲す事其例あり岡澤中將は更に沈
没清艦の木材を以て作れる額面内に威海衛其他の實
景寫眞を挿むを示し且つ清兵の武器不齊一の事實を
説き日清戦役に際し清兵の敗北せる一原因は小銃の
種類區々にして銃丸の補充に困難なりしに存すと論
断せり是より歩を移して臺灣に於て獲たる珍品奇物
を陳列せる一劃に入る

(三)

岡澤中將は幾多の臺灣土人の武器雜品中より先づ二
本の黒旗を指さし説いて曰く嘗て佛軍の安南に戦ふ
や諒山の敗あり後クルールベ一提督の臺灣を侵すや其
陸戦隊淡水に敗北す此敗北を來したる當の敵は實に
此の如き黒旗の下に勇進せる劉永福の一軍號して黒
旗軍と稱するもの是なり其後我近衛師團の臺灣に入
るや所在の匪徒蜂起して遂に兵火を用ふるに至りぬ
當時は知らざりしと雖も跡に遺せる黒旗其他に就て
見れば我に對抗せる土兵は實に勇名歐亞に轟るきし

黒旗軍なりし也而も我に於ては左程に強敵とも感ぜざりき思ふに彼等は一騎打の戦闘には強かりしならんも隊を成し軍を成して共同動作を爲すの道に熟せざりしが故に我兵に敵し得ざりしなり以て軍隊教育の重きを知るべしと一言も日佛兩軍の批評に及ばずして暗に我兵の勇猛歐兵を凌駕する事實を明らかにす此る場合に於ける説明として最も當を得たるものにあらずや

此黒旗二旒の傍らに虎の斑紋を畫ける大旗一枚疊んで臺上に在り中將之を示して曰く是れ臺灣の獨立を

唱へ共和政府を建立せんとせし一群の旗幟なり全面現はすに虎斑を以てす蓋し龍虎二つの者は支那人の崇拜する動物なるが故に其母國たる清の國旗龍を畫くに因み虎斑を用ゐたるにあらざるか其思想の幼稚平凡なる以て獨立の功を奏せむ事思ひもよらずと一笑せり余等も亦た其旗の容體如何にも小供の戯れに作りたるものゝ如くなるを見て失笑せり他に説明を加へられたる物尙ほ三四あり余は楯間の寫眞を眺めつゝありし間に衆相率ゐて館外に去り老將軍の姿も亦た見えす

余則ち館外に出づれば館を去る數歩、二抱えに餘る老松の許に立てるは岡澤將軍なり余等の來り集まるを待ち館前の大錨を指して曰く是れ捕獲せる清國艦内に於て得る所固より今日に用ふる錨にあらず元寇當時の獲物なりとして今猶ほ伯爵松浦家に保存するものと形狀品質同一なるを以て見れば或は元時代の物にあらざるかと、其形異様にして赤く錆び一見千年の古色を有す

錨を距る十數歩に一小臺あり一小樹を植ゆ標して櫻桃樹と記す花咲ふもの既に數點櫻に似て又た桃に似

たる所あり支那人深く此樹を貴とび傳へ言ふ三千年に一回實を結ぶ其實を食すれば能く三千年の齡を保つと中將余等の爲めに西王母の故事を語る枝に雅容なく花に艶色なく葉に奇態なしと雖も蓋し我國に得易からざる名木なり我が皇の園生の榮に列してより此に數年未だ一回も實を結びたる事無しと云ふ櫻桃樹と對して南の方十數歩に一亭あり有光亭と云ふ其四壁は戦利の石額を以て疊み内に威海衛の海口を扼したりし敵の防材を積んで腰掛と爲し屋根を除くの外悉く戦利品を以て巧みに建設せるもの也簡雅

清楚を極む中將容を正して曰く此の有光亭を始め振
天府總ての設計意匠圖案名稱等に至るまで残らず
陛下御自身の御工夫と御指圖によりて出来たもので
あります岡澤如きもの、考へなどは少しも加はつては
居りませぬと更に防材に就て我水雷艇隊の威海衛港
内に侵入せし當時の實況を語り今では水雷艇が此位
の防材を飛び越えるのは何でも無い位に海軍の技倆
が進んださうですと深く海軍の功績を賞賛せり亭の
側らに丁汝昌の劉公島邸にありし庭石を安置す一峰
高く聳えて連山之れに連なり形態幽雅石色古黛宛然

一小關谷を成す故丁氏之を愛玩したる故なきにあら
ず又た石獅二個あり高さ約四尺獅面稍々磨滅して憫
れ鼻目缺損の慘狀を呈せりと雖も海城の一所に安置
せられて滿州の雨露に浴する事凡そ二千年に近かる
べしとは好古家の鑑定する所なりと云ふ是より導び
かれて將に振天府の附屬館に入らんとするや帽子を
取つてと命令する老將軍の聲耳に入りぬ

四

振天府の附屬館は府の西の隣りし大さ本館と相如け
り余は脱帽せよとの聲を聞き何事の在はしますか

知らねども難有さの感に打れ肅然形を正ふし老將軍
 と相對して立つ老將軍亦た辭氣を修め私は今ま諸君
 の前に陛下の御高德の萬分の一を御話しをする榮
 譽を得ます申すまでも無く陛下の御威徳は千萬無
 量であります詳しく申上げましたなら十日や二十日
 で御話しをし盡す事は出来ませんが今ま此の館内に
 陳列し給ひたる名簿と寫眞と軍旗の三ツに就ひて御
 聖徳の萬分が一も御話しをする事が出来るだらうと
 思ひますと冒頭して淳々説明す
 仰ぎ見れば故有栖川大將宮故北白川中將宮故大寺福

原山根の三少將を始め陣歿將校の眞影生けるが如し
 就中故有栖川北白川兩宮殿下の御眞影は大形にして
 鮮明余は右の方咫尺に拜見したるを以て難有さに涙
 溢るゝ思ありき此御眞影の直下壁に接して三段の棚
 あり上段中央に一卷中段及下段に十數の巻物を袱紗
 の上に安置す皆錦襪の表裝軸は光りまばゆき水晶を
 以てす是れ實に陣歿せる將校及相當官以下下士兵卒
 等の姓名録なり上段の一卷には戦死者の芳名一千六
 百七十八人を納め他の數卷には病死者の氏名八千九
 百四十八人を録す明治廿七八年の役我將士の陣に歿

二十二
する者實に一萬六百二十六人 陛下深く其忠勇國事に死せるを嘉し特に戦死病歿せる將士の氏名を徵せられ永く御手元に遺し置かる聖慮の渥き死者の榮や大なりと謂ふべし老將軍は此由來に次で語るらく此の巻物に陣歿者の姓名を録し給ふに當り其字體行間の明け様から表装見かへしの工合まで皆陛下直々の仰せによりて其通りに出來したものであります猶ほ陣歿者の寫眞を集めよとの仰せを受けましたるにつき夫々取集めにかゝりましたが何分多人數の事なれば寫眞のなきものもあり漸やくにして將校及相當

官の分を集めました中には浴衣姿のものもありまして御手元に差出すに躊躇しましたが夫にても苦しからずとの仰せにつき其儘差出しました 陛下には其寫眞につきて一々其氏名其履歴其戦功より父母兄弟妻子の事までも細々と御尋ねあらせられ永代の保存に堪ゆるやう残らず不變色の寫眞にせよとの仰があらしましてそれを御手づから額面へ御挿しになつたのであります 陛下に此額縁は廢銃の木部で作つたのであります 陛下に御自身の御思召に出來たものであります 誠軍人の名譽國民の譽れ私共感泣の外はあり

ません 皇后陛下此れを御覽になりました御時にも
深く 天皇陛下の御思召の程を御感泣あらせられま
したと語り來りて將軍の眼に涙充つ余亦た感涙禁ず
る能はず余が側らに在りし一武官此日余等と共に拜
觀を許されし將校數名ありきの如きは感に堪ず涙滂
沓として巾を沾ほすを見たり此名譽ある戦死將校中
二代續いて王事に戦死したる者三氏あり即ち時山中
尉樺山中尉中野大尉是なり中野海軍大尉の父は維新
の役日光今市に戦死し時山中尉の父は越後口征討の
師に加はりて朝日山に戦死し樺山中尉の父も戊辰の

役奥州白川口に戦死せり將軍の曰く陛下は此話を
聞き召されて深く御満足に思し召されよくも盡した
ものであると仰せられました此三氏の如きは帝國臣
民の好模範と謂ふべし
將軍の話頭更に轉じて聯隊旗に入る館内陳列する所
臺灣守備歩兵聯隊より返納せる聯隊旗六基あり又た
近衛及各師團軍備擴張前に存する聯隊旗の寫眞二
十八枚を額面として掲ぐ臺灣守備聯隊の軍旗は旭線
猶ほ鮮やかなりと雖も他の各師團のものは古色蒼然
として一も完形を有せず破れたるもの裂けたるもの

甚しきは縁飾りの房少しく附着するのみにして只竿頭の菊章に歴戦の光りを放つものあり第十三聯隊旗の如きは半ば裂け失せて其殘部に斑々たる血痕を留む是れ實に熊本に在る聯隊の手に渡し給ひたるものにして神風連の騒動に際し一度び匪徒の手に落ちたる事あり血痕こそ當時此旗を抱いて死せる軍人の血鹽なるべしと云ふ一見悲愴の感に堪へず將軍爲に聯隊旗の性質と由來を説いて曰く歐米諸國に於ては聯隊旗は神の植ゆる所と爲す故に國王大統領と雖も之に向つて敬禮せざるべからず然れども我國に於ては

天皇陛下之を植ゑ給ひて克く國家を護れよと仰せ降し給ふもの也故に陛下は軍旗の敬禮に對して御會釋あらせらるゝも陛下より軍旗に敬禮する事無し是れ我國體の他に異なるが故なり随つて聯隊旗の還納せらるゝものあれば陛下は之を破棄して然るべきものなり然るに臺灣守備隊の編成を大隊と爲したるため六基の聯隊旗還納せらるゝや陛下には之を取捨て給ふに忍びず此の聯隊旗の下に勇ましき忠死を遂げたるもの若干人斯る來歴ある軍旗は永く保存し給はんとて斯くは振天府の内に飾られたる也實

にや我守備の一隊雲林地方に於て敵の重圍に陥る
や各聯隊の軍旗四方より進み來りて九死の軍隊を救
ひ出したる事ありき將軍の説明此に至りて益々精妙
此軍旗の側に砲車及小銃の破損したるものあり之
に關聯する悲惨勇壯の話は何事ぞ余は老將軍の顔を
注視して其説明を聞かん事を待つ

(五)

聯隊旗の傍らに砲車の車輪あり半ば補修して纔かに
形を存するのみ老將軍の曰く田庄臺の戦ひ敵彈此砲
車に命中し一時に我砲兵を死傷せしむる事十數名車

輪は碎けて大砲を運轉する能はず此に於て我兵直ち
に修理に着手し遂によく敵を退ぞけ追撃する事十三
里夫れ泰平の日練兵の場砲車の破損を敵前に修理す
る演習は時に行ふ所なりと雖も實戦に臨み我既に大
損害を受けて猶ほ彈雨の間に其修理を全ふし而も敵
を追撃するが如きは忠勇死を決したる兵にあらずん
ばよく爲し得る所にあらず 陛下此の車輪を御覽あ
らせられさても頼母しき國民である」と御感嘆あらせ
られたりと
砲車輪の左方余が立てる前に二個の小銃あり一は銃

身彈丸の爲に打曲げられくの字状を爲す一は込矢と
銃の木部を打ち折られて銃身亦た凹めり將軍の曰く
平壤の戦敵は天險に據り我は懸軍深く入る兵士の忠
勇美談固より數へ盡し難し其一として語るべきは即
ち此小銃の持主なり我兵に林千代之助なるものあり
常に最前線にありて闘ふ敵彈其小銃に命中して斯の
如くに屈曲するや彼は如何に思ひてか奮然起ち上り
て此銃を地上に叩きつけ赤手敵に向つて突進す共に
奮進せる一卒途に傷つく彼れ直ちに負傷者の小銃を
取り猶ほも前進してよく敵壘に先登せり爾來歴戦の

功を積み勇名全隊に轟るき天晴れ帝國軍人の精華と
稱へられしが不幸にも凱旋の後幾ばくもなく其營に
病死せり又た生蕃討伐の中隊に屬したる一卒某なる
もの一日尖兵として敵に向ふ彈丸其銃を碎いて餘勢
其腕を傷つく隊長見て直ちに退ぞくべしと命じたる
も彼は此一小傷何の事かあらんと前進して屈せず敵
彈益々激しく憫れ勇兵は打倒されたり戦勝ちて後其
屍を検するに傷を受くる三ヶ所にして手に猶ほ銃を
放たず隊長深く其勇ましき戦死を感嘆し固く握りた
る指を折らぬ許りに引離して收めたる彼が紀念物は

即ち此小銃なり斯の如き名譽の死を遂げたるもの豈
 此二三士のみならんや此には只其紀念物の一二を陳
 列して其一例と爲すのみ
 忠死の紀念物たる此二個の小銃と接して硝子張りの
 箱あり内に軍艦鎮遠と海底電線沈設船沖繩丸の模形
 を藏す構造細緻にして精巧を極む鎮遠號の艦側砲塔
 煙筒等に印する無数の斑點は是れ黄海の役我艦隊に
 砲撃せられたる彈痕を示す當時鎮遠艦上に雨注せる
 我大小砲彈の如何によく命中せるかは此斑點以て知
 るべきなり清兵如何に死を決すと雖も斯る彈雨の内

に立つ能はざりしならん此箱の下段に在るは有名な
 る沖繩丸嘗て帝國議會の一問題と爲りしは此船なり
 然れども此船を購ないたるが爲め戦時の交通に如何
 に多くの便益を得たるやは云ふを待たず是れ海底電
 線沈設に用ふるもの船の首尾より電線を吐いて幾千
 哩の海底縦横に電線を張るを得るが故に蜘蛛と蠶の
 働きを爲す船と稱せらる
 此軍艦の話を書するに當り思ひ出せるは先に振天府
 の本館に於て見たる清艦揚威の通風管と臺灣に獲た
 る譯の分らぬ箱の事なり筆路少しく跡戻りを爲すと

三十四
雖も此に掲ぐべし、揚威は黃海の役、清國艦隊横列の右
端に位して我艦隊に突進しけるに我各艦の猛撃に堪
へずして火災を起し遂に坐礁して焼け失せたりき今
其通風管を見るに煙管の雁首を踏潰したる如くにユ
ガみて彈丸貫通の痕蜂窠の如く轉人をして敗艦の慘
狀に慄然たらしむ又た有光亭の側らに方六尺に近き
一大鐵函あり水をたゆ其蓋の中央には英字を以て
パテントと印す然れども其名稱とも思はるゝ上部の
文字は何國の語なるや讀むべからず是れ何事に使用
せるものなるや海軍々人と雖も知る能はず或は敷設

水雷の一種にあらずやと云ふ將軍此不可思議なる鐵
函を説明し了るや語を改ためて曰く斯く譯の分らぬ
品でありますので陛下の御考を以ちましてかくは
水溜に用ゐられたのであります

(六)

沖繩丸の説明を了るや老將軍は館の他の一隅に飾ら
れたる棚上の木片三個を示せり木は松丸太の斷片に
して長さ一尺許り其中部は皆銳利なる鉞を以て切た
る如くに凹みて▲の形を爲し押さば將に折れんと
す云ふ是れ我工兵の鴨綠江に架したる橋梁の橋杭な

三十六
り時方に酷寒上流より流れ来る氷塊晝夜と無く橋杭
に衝突し堅牢なる松材も數日に堪ゆる能はず斯の如
く缺損して終に兩斷せらる寒威の凜烈なる想ふべし
而も寒冽氷を流す水中に浸りて延長數十間の橋梁を
架す我工兵の艱苦に堪ゆるに勇なる眞に驚くべきも
のあり
老將軍は更に此棚の隅より鳥打帽子の如きものを取
り出して云ふ是れ臺灣卑南生蕃酋長の帽子なり鹿の
皮を以て製せり然して此正面に附したる圓形の徽章
は何物ぞ瞥見すれば金色の燦爛たるありと雖も其實

物は紛ふ方なき福神漬の蓋なり思ふに我兵の捨てた
る空罐を拾ひ得て稀世の珍品と爲し酋長自から其頭
上の寶章と爲したるものゝ如し苟くも一蕃社の頭領
にして福神漬の蓋を珍重する斯の如し生蕃の智識の
程度以て想見すべき也然れども彼等の氣慨や愛すべ
きものあり見られよ此弓の如くに反りたる一刀を此
鞞の上部に飾りたるは支那人の辮髮數へて數十本あ
り是れ臺北に近き一生蕃酋長の携さへし寶刀なり彼
が如何に多く支那人の首を截したるか又た如何にし
て彼は酋長の榮位を得たるやは此一刀を以て判する

を得べし夫れ截首の事野蠻の行爲なりと雖も彼等が此舉を敢てする所以のもの抑も故あり彼等は支那人の暴行奸策に迫られ祖先以來住み慣れし平野を去るに至りたるが故に支那人を以て俱不戴天之仇と爲し男兒生れて六歳に至れば父母は之を山頂に伴ないて遠く平野を指さし見よ彼の穰々たる沃野は是れ汝が祖先の開拓したる故土なり今や支那人の爲に畧奪せられて我等は斯る山間に侘しき生活を爲し衣食猶ほ支へ難きに困しむ憤恨何ぞ堪へん汝生れて男子たり他日成長自から立つを得るに至らば彼等支那人の首

を斬つて祖先の墓前に手向けよ忘るなよ我子誓つて彼等と俱に天を戴く勿れとの意味を語り聞かすを式例と爲すが故に男子長じて十七八歳に至れば先づ仇讐の首を揚げて先祖の鬱恨を晴らすを一功業と爲し郷黨又た之を稱賛して多々益々截首の榮譽を高む其行や暴と雖も其志や憫れむべし三尺の蕃童猶ほ且つ支那人の首を斬るものなりとして其刀を愛護す然るに臺灣我王化に浴してより此に六年蕃童亦た校に登りて教を受くるもの少なからず牡丹蕃社の如き最も盛なり試みに此等の學童に示すに此の如き刀を以

てすれば護身刀なりと答へて首を斬る刀なりとは云
はず僅々數年の昔に有したる敵愾心今は消へて跡無
し是れ蕃民教化の一證喜こぶべしと雖も教育の感化
斯くまでに適實なるを見て誰か國民教育の重要なる
を感ぜざらんやと岡澤將軍の説明や言々誠忠の肺腑
より出づ事に觸れ物に就き或は軍器齊一の必要を説
き或は軍隊教練の効果を論じ或は我國體を明らかに
し或は教育の忽かせにすべからざるを示し且つ忠君
愛國義勇奉公の精神を鼓吹するに勉む眞に感服すべ
きものあり

場中最も大にして最も華美なる陳列品を頌徳傘と爲
す蓋し遼東半島我領土に歸したる後我皇の天長節に
際し我大君の御威徳を謳歌し村々在々の名を署して
捧呈せるもの也傘の高さ丈餘紅白青紫色々の支那純
子を張る事蝙蝠傘の如くす開けば方に方數間に及ぶ
べく絢爛目を奪ふの觀あらん而も此傘空しく館に存
して之を捧呈せる者今は何國の民なるや余は一見多
少の感慨無きを得ざりしと雖も老將軍は之に對して
只其由來を語れるのみ一言の説を加へざりき蓋し事
の政談に涉るが故か非か

場の一隅に剥製せる臺灣産動物を藏す就中形體の奇
 なるは穿山甲と標記せるもの也形馳に似て口尖り全
 身悉く薄黒き鱗を以て覆はる聞く其舌を延せば二尺
 に及び其全身よりも長し此獸の餌食を獲んとするや
 其鱗を立て、身を叢間に潜め蚊虻蟻其他の昆蟲其
 鱗間に群がるを待ち忽焉其鱗を閉ぢて一舉彼等を虜
 にし更に身を水中に浸して再び鱗を開けば昆蟲紛々
 として水面に浮ぶ彼れ即ち其長舌を振つて之を其胃
 中に嘗め込むなりと亦た一奇獸にあらずや將軍尙ほ
 説を加へて曰く漢法醫の云ふ所に據れば穿山甲は解

熱の妙藥なりと

(七)

館内掲ぐる所の大額二面あり、一は第六師團の兵摩天
 嶺を占領せる際我兵某直ちに筆を揮つて其實況を寫
 したるもの也此圖に就て見れば摩天嶺は草も木も無
 き巖峯突屹天に聳え山頂は廣からず我兵魚貫して之
 に登り嶺上高く旭日旗を掲ぐ嶺下直ちに海を臨み威
 海衛港内の清艦眇として算木を浮べたるが如し當時
 の戦況は世人之を熟知するが故に將軍も之を語らず
 余等も之を問はず只砲烟猶ほ漠々たる間に這般の大

畫幅を作成せる兵士の沈勇に感ずるのみ
 此額面と相對して今しも敵の砲丸に打碎かれたる我
 浪速艦上一砲邊の慘狀を畫ける大額を掲ぐ云ふ是れ
 艦内の一水兵常に使用するペンキを以て其の目撃せ
 る實況を寫したるものなりと繪畫として精ならずと
 雖もペンキを以て作成せるものとしては巧なり此時
 浪速艦内に破裂せる敵の大弾丸は其破片を拾ひ集め
 漆喰を以て彈丸の元形に補綴せられたるもの振天府
 の本館に陳列せられありき今ま此圖を見て先の彈丸
 を回想し轉當時の慘狀に慄然たらしむ斯て岡澤侍從

武官長は歩を館外に移し余等亦た尾して行く
 行く手に又た一の建物あり振天府の附屬館と相距る
 十數歩老將軍は其前に立ち敬禮して後余等を顧みて
 曰く大陸下時に玉歩を此府に移し給ふの時御休憩
 あらせらるゝ御座所は是なり見られよ柱に懸けたる
 八角時計を是れぞ大元帥陛下廣島の行宮に在ます
 の時日夕御座右に在りて寸秒の油斷も無く奉仕した
 る名譽の時計なり而して其品は少しの虚飾なく我々
 の家に在るものよりも却つて御粗末なるは以て陛
 下の御儉徳に富ませ給ふを知るべしと謹んで拜見す

四十六
れば如何にも普通否普通よりも稍劣りたる所謂八角
時計にして一點の飾りを見ず更に御座所を拜し奉る
に入疊敷のト間に絨段を敷き詰め繞らすに外椽を
以てし椽上敷くに蒲蓆を以てす御障子は半ば硝子を
以て張らる御床の間には廣島大本營繪圖面の一軸を
掲げ其下に一綴の書冊あり大本營繪圖面の説明書な
るやに承はる御休息所としては只此一ト間の建物の
み柱には丸木のものあり質素にして清雅金殿玉樓に
起臥し黄金の屏風萬金の軸猶ほ飽くを知らざるの徒
幸に陛下御儉徳の萬分の一を學び奉らば人生安心

立命の域に達するを得べし
御椽を距る數歩千歳の翠に誇る老松兩三株あり龍鱗
赭く輝やきて枝は天女の翅の如く伸びに伸びて將に
地を嘗めんとす松下に圓卓二臺及椅子數脚を配置す
卓上及び御椽の端に菊の御紋章を高蒔繪せる小箱あ
り盛るに巻烟草を以てす臆て將軍は恭しく一同に申
告すらく陛下より皆さんに巻烟草を下し賜はりました
たと余等謹んで御禮を申上げ各々恩賜の煙草を燻ら
しつゝ盤々たる松が根を踏み立つて前方を臨めば美
なる哉帝都の榮千門萬戶薨を列ねて遠く品海に連な

四十八
り愛宕の山は鬱蒼々として目睫の間に立ち日比谷原
頭三官廳の赤壁は自茨が岡參謀本部の白壁と相對峙
して巍然異彩を放つ更に眼界を狹めて近く脚下を臨
めば禁濠に沿へる道路蜿蜒帶の如く途上の人馬絡繹
旁午して眉目明らかに辨ずべし聞くならく兩陛下
折々此府に御遊歩あらせらると途行く童も注意せよ
汝等途上の一舉措も時に陛下の御目に觸るゝこと
あるを知らず識らず非禮不敬の民と爲る莫れ一日
皇后陛下此府に御遊歩あらせらるゝや會々一群の囚
徒珠數の如くに繋がれ屠所の歩を運んで法廷に入る

陛下遙かに御覽あらせられ侍臣に其何人なるやを問
はせらる侍臣惶懼答ふる所を知らず退いて之を司法
の有司に告ぐ有司其の恐れ多きを知り爾來囚徒を裏
門より出入せしむとは余の嘗て聞く所なり

(八)

日比谷ヶ原と自茨ヶ岡の間に舊教導團の敷地跡あり
雜草地に滿ち瓦礫堆を爲し荒寥殘破の跡歴歴として
一帶水の前に在り眼下壯大の美觀も此一廢墟の爲に
沒了せられざるを得ず老將軍亦た此に憾あり余等に
説いて曰く此一區域を以て日比谷公園の附屬地と爲

し庭園を整へ運動の場を説くあらば天麗らかに氣
澄むの日 陛下此府に玉歩を運ばせられ親しく人民
鼓腹の樂を御覽あらせらるべし若し夫れ小學の兒童
隊を成し列を正し遙かに 陛下を拜し奉りて君が代
の唱歌を奏するあらば又た一段恭敬の妙あらずやと
聞く有栖川大將宮の御銅像も近く自莢坂の邊りに建
立せらるべく北白川宮殿下の御銅像も宮城の西北に
建立せらるべしと願はくば多く功臣名士の肖像を鑄
つて皇城の四周に立たしめ一は以て忠君愛國の範を
後昆に遺し一は以て皇城四周の美觀を添ふるを得ん

松下の休憩少時にして老將軍は更に余等を導いて進
む事西の方十數歩屋根ありて壁なき一字に入る場内
に大砲及機關砲を陳列す悉く廿七八年の役敵より收
むる所なり成歡の役清兵より奪ひて平壤の役清兵の
攻撃に使用せる野戰砲は敵の兵を以て敵を撃ちたる
名譽の紀念物也其側らに四臺の野山砲あり野砲と山
砲との効を兼ねるが故に此稱あり當時新銳の巨砲我
に無くして彼獨り之を有したりしも清兵に之を運用
する技能なかりしが故か一回も使用したる形迹なく
新調の儘空しく我兵の手に收められたるは戰敗に増

したる不名譽にあらずや、他にホチキス其他の機關砲あり將軍一々之が由來之が運用之が効力を説き最後に自から一機關砲を運用しつゝ曰く斯の如くして小銃彈を敵に兩注し三十分を出てずして一萬人の縦隊を皆殺しにするを得るなりと其語氣の輕妙にして其斷言の勇なる思はず余等をして一笑せしめたり此一字を離れて更に西に進めば前方數間に一大門扉の立つあり高さ丈餘張るに悉く鐵板を以てし一大鎧袖に似たり近づき見れば下部は破壊して大さを匍匐通過せしむべき穴隙を爲す將軍之を指さして曰く

是れぞ第一師團名譽の紀念物として運び來りたる金州城門の雙扉なりダイナマイトを以て之を破壊したる小野口徳次は諸君の居らるゝ第一師團管區の壯兵なり我兵は斯く門扉に大穴隙を作りたる後之を潜り入りて内より城門を開きたる也當時の實況は後之を畫にし更に之を寫眞したるもの即是なりとて將軍は一の寫眞を示されたり余は日本之旗風に於て天津城門破壊の實況を知る詳らかなりしが故に此門扉を實見し此寫眞を目にするや當時我工兵の勇躍奮進して直立丈餘の城壁下に爆藥を裝置したる勇姿を目睹す

るの思ありき
 此門扉の前に白塗りの大球を竿頭に附したる抱大の
 旗竿數本を横たふ是れ劉公島の清國兵營に建てられ
 たるもの其木質は鐵刀木所謂タガヤサンにして昔し
 渤海灣の警備に使役せる帆走軍艦の帆柱なりしと云
 ふ之れに懸けたる鐵網は即ち清艦定遠の魚形水雷防
 禦網なり之と相對して花剛石に刻みたる獅子二個を
 安置す高さ一丈を超ゆ仰ぎ見れば牙を現はして天を
 睨むの態度猛氣横溢して眞に稀世の名作なり是れ臺
 南に於ける劉永福牙營の門側に在りたるもの也聞く

ならず清國の制として四品以上の將軍營にあらざれ
 ば石獅を飾る能はず而して康熙年中滿洲の旗人某位
 四品を戴いて臺南に鎮將たりし事ありしを以て察す
 れば此石獅こそ康熙の昔に刻まれたるものにあらざ
 るかと老將軍の説明詳密なりしと雖も余は金州城門
 の前に佇立して暫らく老將軍と隔たりたるが故に他
 の話を聞漏したるは遺憾なりき
 振天府の境内此に盡き衆再び松樹の下に集まり恩賜
 の煙草を燻らしつゝ老將軍と語る事少時將に辭し還
 らんとするや老將軍は語を正ふして曰く是から御前

五十六
へ参りまして皆さんの拜観になりました模様は詳しく申上げます猶ほ皆さんに代つて私より陛下に御禮を申上げますから左様御承知下さいと余等深く其好意を謝して此に老將軍と別れ元と來し路より二重橋に入り坂下御門の邊りに至れば一樹の彼岸櫻滿枝花を綴りて翠松青柏の間より現はれ余等の歸るを送るものゝ如くなりき

1/36
振天府拜觀記終

明治三十五年五月十二日印刷
明治三十五年五月十五日發行

定價金拾六錢



不許複製

編輯者 宮川鐵次郎
東京市牛込區天神町十五番地
發行者 吉川庄一郎
東京市赤坂區田町三丁目十番地
印刷人 青木弘
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所 株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所

東京市赤坂區田町三丁目十番地

保成堂

東京市赤坂區表町一丁目

兵事雜誌社

賣

全 一ツ木町

山口書店

全 神田區表神保町

東京堂

捌

全 日本橋區通一丁目

大倉書店

全 通三丁目

丸善株式會社

所

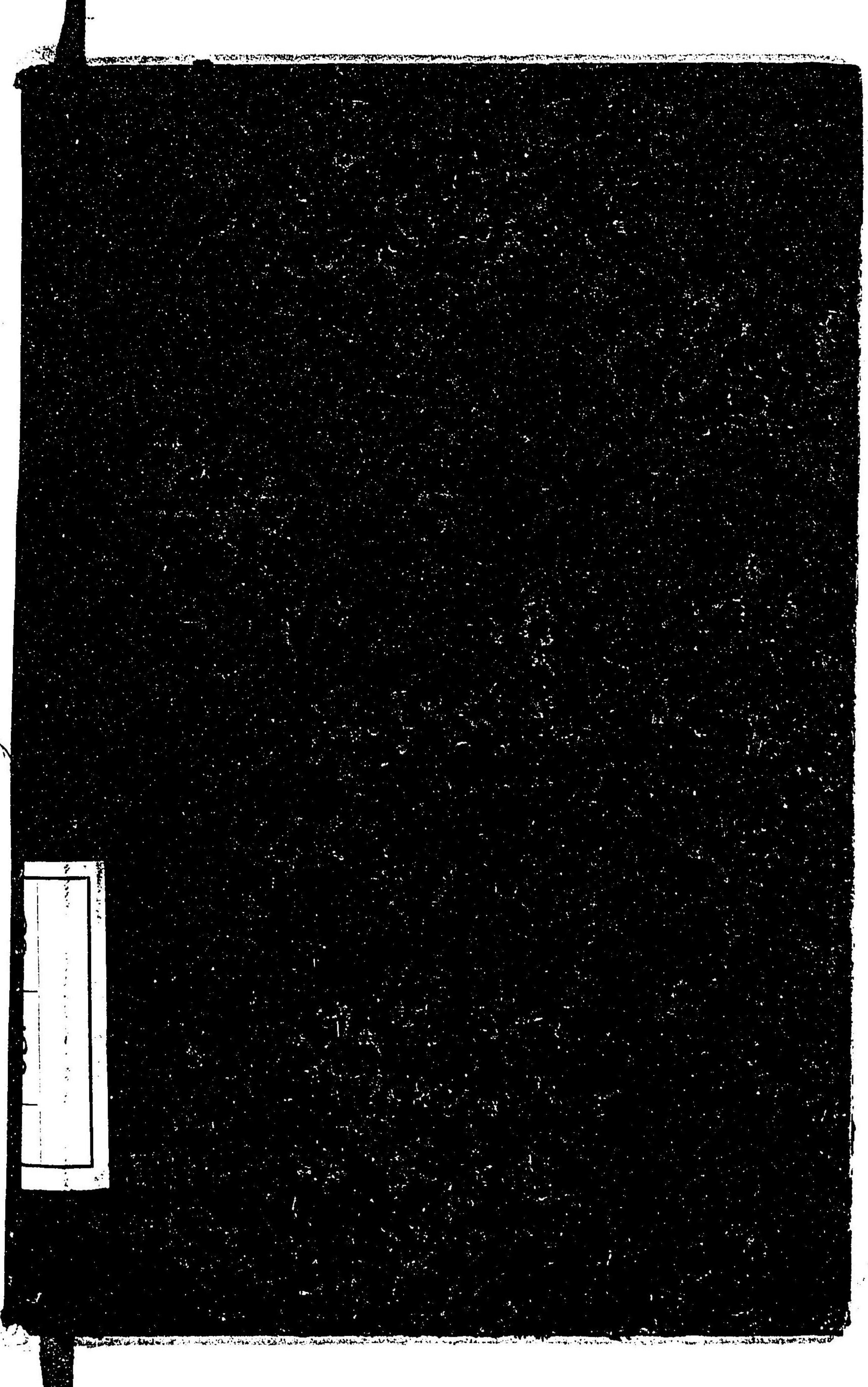
大阪市東區博勞町四丁目

丸善支店

全 備後町四丁目

盛文館

92
180



Small white label with illegible text or markings.

92
180

(M)

振天府拜觀記

026571-000-4

92-180

振天府拜觀記

宮川 鉄次郎 / 編

M35

ADD-0250

